

もう八年前になる。一九九九年の五月、アフリカの北部、砂漠の国、モロッコに商用で出向いた。ロンドンからカサブランカ経由で、夕刻にマラケシュに入る予定だった。到着が五時間余り遅れたその便は、トランジットの案内も無いままに、私達にムハマド五世空港で数時間の難民体験をさせてくれた。掠れ行く街の夕景、末期の労咳患者の様に点滅する采けた蛍光灯、鋭い金色の眼光の兵士とその手に構えられた軽機関銃。同機で到着したサイクリングカーを抱えた仏人達とロビーの片隅で今後の運命を予測し合った。夜の帳が下り、物事に輪郭が無くなった世界、突然「バスに乗れ」と指令が来た。ホテルへの案内と期待して私達は微笑んだ。——彼

産業春秋

藤田 國廣

題字 今井 敬氏

内もトイレもサンドイッチも何も無いままに5、6時間走り続け、そして未だ夜も明けぬ、何処かの街の何処かの広場に荷物と一緒に置き去りにされた。彷徨いながらホテルに到着したが、今度は呼べど叫べど人影は無く、フロントマン？が現れたのはその後一時間が経ってからだ。怒る気力も無くそのままベッドに倒れ臥した。翌朝から三日間の現地での仕事が始まったが、明せずしてそれは「ユーアー・アンラッキー」

日本の常識・アフリカの常識



私は思わずヒニールシートから落ちそうになった。カサブランカからマラケシュ迄は凡そ三〇〇キロ、飛行機で四十分余りの距離である。バスに乗ったのが午後十一時過ぎ、それ以降、案

興奮と驚愕と感嘆の毎日だった。帰国となり、灼熱の太陽から逃げる様に又ナラ空港に飛び込んだ。まだ出発時刻まで三時間余りある。するとカウンターの係員が寄ってきて「直ぐに飛ぶから搭乗しろ」と急ぎ立てて来た。「未だ三時間も有る」と返す我々に「客が少ないから今からワルザサードに客を拾いに行く」と云う。ワルザサードはマラケシュから南東に約一五〇キロ、四千餘のアトラス山脈を越え

で解決させられると聞かされた。そしてその彼は「アフリカのある国で、飛び立ってから突然行き先の変更を告げられ、降ろされた場所から一週間掛けて元の場所まで、ラリーさせられた」と言ったが本当だろうか？

とも有れ、話としては好きな部類である。十秒の狂いも無く、一瞬の行き過ぎも無く絶え間なく発着する日本の鉄道、文明や文化の質と量の違いと云えばそれ迄だが、その中で営まれる人生や生活の豊かさとの関係には思案を廻らす。私も最近、歳の所為か少しアフリカの思考や言動が多くなって来た。それを気に入っている処もある。どちらが良いとは一概には言えないが、文明とは便利な分だけ窮屈な事も事実であり、きっちりしているという事は新鮮な感動や思わぬ幸せを疎遠にさせ易い。アフリカの常識と日本の常識、その両方を体験出来る今回の人生はちょっと得をした様で感謝している次第である。

(メタルドゥ社社長)